

何であらうと耳を歌て聞いて居りますと、深夜と云ふものは遠音のさすもので、幾間も距つた台所の話聲が、手に取る如くに聞えます。「サア各々、支度が宜くば、卒や勝義の疵首を搔いて、海間の恨みを晴らして呉れん」と、下知を致して居るは正しく、圓海は驚いた。「サア失敗つた、彼等の甘言に欺かれて、さては敵の計略に陥つたか」と思ひまするが、今更遁げ出すと云ふ譯にもなりませんが、早くも寢床より飛び起ちて身支度を致し、兩刀手狭んで待つ所へ、何うやら大勢は此方へ近寄り来る様子に、其の身は片傍の丸行燈の鞘を抜き取り、早くも蒲團の中へ差し入れ、燈火を消して其の身は縁の端へ出でまして、裏と表の目釘を濡し十分支度に及んで待つとも知らず、ドヤ／＼と其室へ乗り込んで参つた五六十名の者、圓海「サア十分」に突入端だ、ソレ遣れい」と早仕未練にて圓海の下知に應じて、忽ち一刀を逆手に振り被つた

大黒堂の金山「思ひ知れッ」と言ひながら、グサ／＼と蒲團の上から突貫した、行燈の鞘は潰れてベシヤ／＼と挫折げて了ひました金山「オヤッ、サア大變」と、蒲團を掀つて見ると此は抑も如何に、中には行燈の鞘が挫折げて居つて、小太郎の姿は更に見えませぬ、圓海さては早仕にも彼奴風を食つて逃げたに相違ない、し遣くは行くまい、ソレ各々跡を追掛けさつしやい「同合点」と大勢は今縁側へ飛び出さんと致した時、塚原小太郎は大音聲に、小太「ヤア、大勢の奴輩確かに聞け、逃げるやうな塚原小太郎にあらす、卒や來れッ」と云ひながら、大刀八相に振り被つた、大勢の者はハツと驚いたが、中にも第一番に彼の賊心坊「汝れの爲に大の耻辱を取つた、我が恨みの一刀受けて見よ」と、忽ち夫れへ斬り込んで來た奴を、ヒラリと体を懸して、片手上段に打ち下した一刀の爲に、肩口から乳の下へ、袈裟掛けに斬り下げられ、胴体二つになつて相果てました、すると大黒堂の金山「汝れッ」

と言つて斬り込んで来る奴を、小太何を為す」と言ふより早く、打ち下した一刀の爲に、脇天より幹竹割と相成つて、血煙立つて、れへ倒れました、之れを見ると一同の聲、鯨波を作つて四方八方より、ドツとばかりに斬り込んで参る、素より覺悟の前の小太郎は、右に拂ひ左に拂ひ、僅かのうちに二三十人、肩間肩腰手足の嫌ひなく、或は袈裟斬、幹竹割、又は胴斬と、手當り次第に斬つて棄てましたところでありすが、其の有様と云ふものは實に物凄いの山の様、合然るに相手は新手が入れ代り立ち代り、羽黒山の山伏の連中が追々馳せ集り、人数は彌が上にも加はつて参る、信濃坊圓海は「何でも彼れでも彼れを斬ら取れ」と、激しく下知を致します、如何に天晴れ遣ひ手の小太郎とても、素より鬼神ではありません、到底之れを斬り盡すことは出来ぬ、一旦此の處を遁れるより他に途はなしと、覺悟を定め、忽ち裏手の築山の方を登つて参り、エ、イと一聲叫んで、二間ばかりの高城を飛び越し

ましたが、屏の外にも數多の曲者、銚揃へて「ソレ塚原を過がすな」と斬つて掛りました小太心得たり」と、又々渡り合つて右左に斬り拂ひ、到頭一方の血路を開いて、其のまゝドン／＼と逃げ出したることございます、同ソレ、彼れを過がすな」と、ワ、手も辨へません、唯足の向く方へ、ドン／＼と、駆けて参りましたることございまして、漸う一つの谷間の傍の繁茂の處へ逃げて参りましたが、唯遠くに人聲がするどばかりで、何うやら追手も来らぬ様子に、ホツと一息吐いて氣が弛みますると、身体に十分疲勞が出でまして、身体には一二ヶ所の輕傷があつて痛みを感じます、見ると片傍に谷水がチヨロ／＼と流れて居りますから、是れ幸ひと近寄つて熊笹を掻き分け、兩手を以て水を掬ひ、グツと一口飲んで咽を潤はして居りますと、何時の程に忍んで参つたか怪しげの曲者、物をも言はず卑怯にも、忽ち近寄り

金剛杖を以て、塚原の兩足を留んでヤツと横に拂ひました、如何
に天下の豪傑でも、身体十分に疲れ切つて居る所へ、よもや此様
な處に敵が居ようとは思ひませんから、控平して居る所を、向腰
を甚かに撃たれました、アツとばかり夫れへ倒れました奴を、四
方からバラ／＼と五六人の山伏が飛び出して来て、手取り、足
取り、折り重つて小太郎を取つて押へ、到頭高小手に縛りたる
ことでございます、何うだ遣つたか、〇遣つた、〇必らず
通すな、細尻を取つて其んなり引立てます、小太郎は如何にも
残念に思ひますが、今は身体自由にならぬ所から、據どころな
く引立てられまして、元の信濃堂へ歸つて参りました、弟子坊主
より此の事を申し入れますと、圓海は大いに悦びまして、早速
目の前へ引き出させ、圓海や小童、汝は能くも我を彼れ程まで
融い目に遣しやアがつた、汝れは思ひには殺さぬぞ、必らず當
山の法通、彼の鉢ヶ峯の絶頂より谷間へ吊し置いて、其の上明

口に相成つたら、一寸試し五分試しに致して呉れるんだ、ソレ者
共、鉢ヶ峯へ引けい」と下知を致した、今は塚原小太郎觀念をい
たしまして、物をも言はず兩眼を閉ぢ、齒を咬ひ緊つて居ります
る奴を、情容赦もあらばこそ、ブン／＼と身体を引き擦つて参り
まして、當羽黒山の絶頂、鉢ヶ峯と云ふ處へ伴れて参りますと
此の處に深さ千尋もあらうと云ふ谷間あり、内方は岩角所々に出
で、底は霞が張つて、晝間尙ほ判然と見えないと云ふ位、其の絶
頂の所に一本の松の大木がありますから、やがて彼の山伏連中は
高小手に縛りたる塚原の兩足を、太き縄を以て緊乎と縛りま
して、其の繩を一方の右の松の樹に括り付け、小太郎の身体を逆
様にして、スル／＼と谷間へ下し、凡そ五六間下の途中に逆様に
吊り下げました、ア何のことはない、鹽物屋の軒下に大きき鉢
が吊ら下げてあるやうな鹽梅式、斯く致して一晩と云ふもの棄て
置きました、翌日に相成つたら是れへ乗り込んで参り、一寸試し

五分試しに仕よう云ふ、何の位天晴れなる天下の森も、斯様な目に遭はされて見ると、次第々々に血汐は頭へ上つて參る、一晩中も此様な處に吊つて置かれようものなら、到底一命は助かる、一氣遣ひはない、斯く致して置いて山伏は、ドツと笑つて信濃堂へ歸つて了ひました、サッ、小太郎の身は如何相成りまするか、生か死か、實に是れ風前の燈と云ふ有様、お話は是れより益々佳境に入るのでございますが、如何せん紙數に限りがございまして、原念ながら本編は是を以てお預りと致し、直ぐ引續きまして、却つて羽黒の山伏連へ逆寄を致すと云ふ一段より、末に至つて奥州に於て、父土佐守の仇討を致すと云ふお話まで、其の間の奇談珍話、又は武勇のお物語を網羅し、塚原小天狗と云ふ表題の下に、事細かく言上仕りまするから、何卒近々出版の上は、本編と御引合せの上、相變らせなう、永當々々御高評御愛讀の榮

を賜はらんことを、伯龍茲に伏して希ひ置まします。

日本
武術
傳本

上 泉 四 天 王 (巻)

257
514

明治四十一年七月十日印刷
明治四十一年七月十三日發行

不復
許製

〔附與王天四泉上〕

發行人 博多久吉
大阪市南區大寶寺町西之町廿二番地

印刷人 井下幸三郎
大阪市南區末吉橋通四丁目十六番地

印刷所 浩進舍
大阪市南區心齋橋北詰西へ入

大阪市南區大寶寺町佐野屋橋筋西へ入南側

發賣所 博多成象堂



Handwritten text in a stylized, cursive script, possibly representing a name or a signature, located in the lower right quadrant of the image.



096980-000-2

特9-227

上泉四天王 (日本武術伝)

神田 伯竜 / 講演

M41

DBS-0713

